



Science Media Centre
where science meets the headlines

「MMR ワクチン論争」から学ぶ “MMR : Learning Lessons”

英国サイエンス・メディア・センター（SMC）主催会議報告書
2002年3月2日

【翻訳版 Ver.2.2】

サイエンス・メディア・センター（日本）

Science Media Centre of Japan

www.smc-japan.org

（翻訳版完成：2010年2月12日）

（加筆修正：2011年1月7日）



Science Media Centre of Japan

SMC

一般社団法人

サイエンス・メディア・センター

【目次】

日本語版に際しての訳者前書き	2
サイエンス・メディア・センター（SMC）とは.....	3
会議開催の背景.....	3
会議の形式について.....	4
報告書の形式について.....	5
経験を通じてどのようなことを学んだか.....	5
より大きな視点からー 公共政策としてのワクチン.....	6
はしかか自閉症かーあなたが決める.....	7
「白衣を着た者たち」による攻撃？.....	7
メディアの影響.....	9
結論.....	10

【注記】

翻訳にあたっては、日本の読者のために脚注を記載した。

日本語版に際しての訳者前書き

本報告書は、英国サイエンス・メディア・センターが、その設立にあたり科学者とメディア関係者を集めて行った会議の報告書「MMR: The Learning Lessons」の翻訳版である。日本の読者には、英国に始まり世界で大きな議論を巻き起こした「新三種混合（MMR）ワクチン問題」には馴染みが無い方も多と思われるので、この事件の背景に関して簡単に説明しておこう。

MMR ワクチンとは、麻疹（はしか）、流行性耳下腺炎（おたふく風邪）、風疹（三日はしか）の三種の疾病に対する混合生ワクチンである。日本においては1988年から1993年まで実施されていたが、無菌性髄膜炎の副作用の懸念から強制接種は中止され、現在は個別接種となっている。

英国におけるMMR ワクチン問題とは、1998年にA.J.ウェイクフィールドがランセット誌に発表した研究結果¹を発端とする。この論文は、12症例の検討に基づき、MMR ワクチンの接種によって小児に自閉症の発症が高まる可能性を示唆していた。

この報告に対しメディアは敏感に反応した。近年、自閉症は国際的に発症率が上昇しているが、その発症メカニズムは明らかではない。そこに登場した「自閉症の原因はMMR ワクチンの接種だった」という明快なストーリーは、メディア、そして自閉症の子供を持つ親に歓迎されたのである。

ウェイクフィールドの研究結果は、その分析上の問題と結論に到るまでの因果関係の曖昧さから、科学界からの批判に晒された。しかしウェイクフィールド自身は「自分の研究結果に科学的間違いはない」といった主張した後、メディアを通じて自分の正当性を主張することに腐心した。そして科学的議論を避ける彼に対する批判が科学界で高まり、政府が事態の火消しにやっきになればなるほど、ウェイクフィールドは、英国メディアと市民の判官贔屓により「孤立無援の状態で、大衆のために政府と学会の権威に立ち向かうヒーロー」として祭り上げられていった。これは結果として社会不安を引き起こし、ワクチンの接種拒否などの事態につながった。ちなみに1998年以降、英国内の麻疹感染者は顕著に増加している²。

ウェイクフィールドの研究結果は、後に多くの研究によって否定され³、この会議報告書に見られるような長きにわたる論争を経て、2010年2月2日付けでランセット誌による論文取り下げという結末に到った⁴。さらに2011年1月5日には、この事件の端緒となった論文は、ほぼ捏造に近いものであったことが、ジャーナリストの調査によって明らかになった⁵。しかし、ウェイクフィールドの論文は、発表された当時から明確に否定されうる研究だったわけではない。「ある仮説がデータの裏付けを伴って論文というかたちで提示され、さらなる学術的な検討によって否定された」という流れ自体は、科学の正常な動作プロセスに過ぎない。問題は、メディアを通じて流通した一つの科学技術情報が、ある時点から科学コミュニティの議論を受け付けない「世論」として拡大し、暴走を始めてしまったという点にある。

本報告書は、このMMR問題に関わった科学者・メディア関係者の議論の記録であり、科学的問題が社会の中で扱われる際に起こりうる問題と、その対処について、多くの示唆を含んでいる。本稿が、こうした問題に興味をお持ちの方々の参考になれば幸いである。

2011.1.7 田中幹人（早稲田大学政治学研究所 ジャーナリズムコース 准教授）

¹ A J Wakefield, S H Murch, A Anthony *et al.* "Ileal-lymphoid-nodular hyperplasia, non-specific colitis, and pervasive developmental disorder in children" *The Lancet*, Vol.351, 9103 (1998)

² Health Protection Report: <http://www.hpa.org.uk/hpr/news/default.htm#msls%23msls>

³ これらの研究には、日本で行われた疫学調査も含まれている。本文中で述べたように日本はMMR ワクチンを導入したが、その後で中止したという特異な経緯を持つ国であったため、ワクチン導入中と中止後の自閉症発症率に対する疫学調査が横浜で行われた。この結果は、MMR ワクチンと自閉症の関連性を否定するものであった。[Hideo Honda, Yasuo Shimizu and Michael Rutter, "No effect of MMR withdrawal on the incidence of autism: a total population study", *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, Vol. 46(6), pp572 – 579 (2005)]

⁴ "Retraction—Ileal-lymphoid-nodular hyperplasia, non-specific colitis, and pervasive developmental disorder in children" [http://www.thelancet.com/journals/lancet/article/PIIS0140-6736\(10\)60175-7/fulltext](http://www.thelancet.com/journals/lancet/article/PIIS0140-6736(10)60175-7/fulltext) (09.02.03)

⁵ 参考：<http://www.bmj.com/content/342/bmj.c5347.full> (11.01.07).

サイエンス・メディア・センター（SMC）とは

2002年4月2日に活動を開始したサイエンス・メディア・センター（SMC）は、科学に関するニュースが注目されているときに、科学界の意見、解釈や視点などをニュース・メディアに伝える独立機関である。この組織は、英国上院の科学技術諮問委員会の第三次報告書「科学と社会」によって提示された「最新のニュースに科学を適合させる」という難題に取り組むために設立された。

SMCの最終目標は、ニュースの見出しを賑わせる科学記事の中で、特に見解の分かれるものについて均衡のとれた正確な記事を増やし、市民の科学に対する信頼を取り戻すことである。

SMCのより詳細な情報に関しては、www.ScienceMediaCentre.orgを参照されたい。⁶

会議開催の背景

この会議—“*The MMR : Learning Lessons*”は、SMCの主催のもと、2002年3月2日の木曜日 午後4時から6時まで王立協会で開催された。会議には50人が出席し、SMCの代表であるフィオナ・フォックス(Fiona Fox)が議長をつとめた。

ここ何年ものあいだ、MMR ワクチン（新三種混合ワクチン、MMR）は、高まり行く議論の的となってきた。ワクチン接種と自閉症の発症との関連性が繰り返し指摘されるなか、大多数の研究者は「MMRは子ども達をはしか、流行性耳下腺炎（おたふく風邪）、風疹から守る上で最善の方法であり、自閉症の発症との関連性は証明されていない」と主張してきた。

だが現実には、科学界の圧倒的な見解にもかかわらず、市民はそれに納得しないままである。その原因の一つは、メディアによる問題の取り上げ方であろう。これが、SMCが「MMRとメディア」に関する「教訓から学ぶ（レッスン・ラーニング）」会議の開催を決定した理由である。

会議は以下のような問題を検討するべく、構成されていた：

- ・2001年から2002年2月にかけてメディアがMMRへの関心を高めていった時期、科学界はメディアに対して効果的に働きかけていたか。「はい」ならば、どのように？「いいえ」であれば、それはなぜか？
- ・(MMR ワクチン接種と自閉症の相関を指摘した) アンドリュー・ウェイクフィールド(Andrew Wakefield)の研究結果がメディアの本格的な注目を集め始めた1998年以来、どのような試みがなされてきたか。
- ・科学者は、少数意見を擁護し、反権威的な立場を取ることを好むニュース・メディアに対しては無力なのだろうか。

⁶ 日本における同種の活動は、Science Media Centre of Japan (www.smc-japan.org)が行う。SMCJはJST社会技術研究開発センター(RISTEX)の平成21年度研究開発プロジェクトとして資金援助を受け、本稿時点では2010年中の本格的な活動開始に向け、準備中である。なお、英国の本案SMCとSMCJは情報面での協力関係にあるが、組織としてはそれぞれ独立している。

・もしも科学に対して不信が高まっている理由のひとつが、科学の動作原理に関する根本的な誤解に基づいているならば(例えば、科学は常にただ一つの、科学者間で一致した見解を持ち、100%安全であるという保証を行うことができる、など)、私たち科学界は MMR のような問題に対するメディアの関心を、危機よりもむしろチャンスと捉え、正しい科学の動作原理を伝えるために利用できるだろうか。

・現在のメディアの MMR に対する注目から、私たちはどのような教訓を学ぶことができるだろうか。そしてそれを踏まえて、私たちは次の事態にどのように備えるべきだろうか。

会議に招かれた人々は、いずれも科学、政治そしてメディアの各領域の第一線において、MMR に関する科学的な議論の進展のために尽力して来た方々であった。私たちは、これら参加者の体験に基づいた議論によって、科学がメディアを通じて一般社会とのコミュニケーションをどのように向上できるか、その方法が明らかになることを期待した。さらに、SMC の重要な目的の一つは、科学者とジャーナリストの関係性の向上である。私たちは、この2つの集団が MMR のような問題について議論することのできる会議を開くことを通じて、互いの専門領域に関する理解と尊敬の念を持つことができると信じている。出席者全員ができる限り率直に意見を交わすことができるように、会議における発言者を特定できる内容はオフレコとし、この報告書は議事録と録音に基づいて作成した。

会議の形式について

私たちは「MMR とメディア」の問題について、大きく2つのパートに分けて議論した。まず議論の中心に据えられたのは「(科学界からは) どのようなメッセージがメディアに提示されたか?」という点である。この問いは、さらに次のような要素を含んでいる: それらは科学者や医者意見を伝える上でどれだけ効果的であったか? / これらのメッセージに対する一般社会の反応はどのようなものであったか? 対処すべき他の問題はあったか? / 将来、より効果的なコミュニケーションを行うために、この直近の出来事から私たちは何を学ぶことができるか?

● MMR に関するメッセージの例:

「MMR はまったく安全である」

「はしかによるリスクは MMR ワクチンによる、いかなるリスクよりも大きい」

「専門家を信じよう」

「3 種混合ワクチンのはしかの単独ワクチンよりも、はるかに効果的なのだ — 子供を持つ親にワクチンの選択肢が与えられていないのは、このためだ」

「ウェイクフィールドの研究結果は疑わしく、科学の中では少数派の意見である」

「予防接種率は減少していない—したがって、危険はない」

次に議論の中心となったのは、「これらのメッセージはどのように広がったか?」という点である。この質問は、次のような要素を含んでいる: どのようなメディア戦略が医者や病院組織、政府機関、科学者によって用いられたか? / また、それらはどれくらいの効果があったのか?

●メッセージの拡大過程における各ステークホルダーによる戦略の例：

MMR ワクチンを支持する親の団体はあったか？彼らの主張は耳を傾けられていたか？

MMR に関するメッセージはどのように周知されたのか？ —記者会見、個人による声明、医者によって執筆された記事？

異なる研究機関や組織同士が、それぞれの意見を交換するような場は設けられていたか？

科学者達はメディアの興味レベルに対応する準備があったか？

報告書の形式について

この報告書は、会議中に出された意見を要約したものである。これらは SMC による意見、もしくは提案ではない。オフレコという会議の性格を損なわないようにするため個人の意見は発言者を明らかにせず、発言の引用は行っていない。

経験を通じてどのようなことを学んだか

言うまでも無く、自由討論形式の会議で簡潔な答えを出すことは難しい。今回の会議でも、科学コミュニケーションに関する非常に複雑な問題の、様々な側面が議論された。しかしながら、その議論の中からは、一般市民へのリスク・コミュニケーションにおける主要な問題の幾つかが特定された。多くの事例証拠と共に提出されたこれらの意見は、次の二つに大別することができる：

- ・透明性と開放性は、今や市民の信頼を獲得する上で頼ることのできる唯一の手段である。科学者やスポークスマンは事実をはっきりと、率直に提示し、アドバイスを提供しなければならない。そしてその後は、市民が自己の利益を考えどのように行動すべきかを決定するに任せるべきである。この自己決定モデルは食品基準⁷によって実行されており、多くのジャーナリストから受け入れられている。

- ・市民に対して関連するリスクや理論的に導くことのできるリスク、未知の事象等によるリスクを提供することは思考の麻痺状態へと導くだけである。不確かさに直面すると市民はたいてい何もしないか、妥当な決断とみられるものを選択する傾向にある。これは、MMR の件に関しては深刻な公衆衛生問題に発展し得る。親は、誰かが「これは安全だ」というものを信じたがるのだ。

出席者の多くが「MMR は安全である」という声明を出しても効果は薄いと考えていた。なぜなら、この「安全」という概念は絶対に証明することができないからだ。おそらく、この問題に対するより賢明なアプローチは、個人の問題と公衆衛生の問題をはっきりと区別することであろう。MMR ワクチンは単独のワクチンにくらべて副作用が少ないわけではないが、人口全体としての免疫力を高める効果を考えると、子供たちの健康を守るうえで最も効果的な方法である。しかし、このメッセージを伝える試

⁷ Food Standards Agency, FSA

みは「集団免疫(herd immunity)」という専門用語への言及により、人々の心に「科学者達によって、牛のように扱われているのではないか」という懸念を植え付け、失敗してしまった。⁸

開放性と透明性のモデルを用いれば、「リスクと利益(ベネフィット)」の検証が市民に提供されることとなる、と主張する人もいた。残念なことにこれはリスクが不確実な時、もしくは、ほとんど無い時にはあまり効果がない。また、個人に対する利益よりも、全人口に対する利益があるということの人々に納得してもらうのは難しい。人々が納得してもらうためには、個人的な体験よりも疫学や統計と言った、よりわかりにくい言葉を説明に用いなければならないからだ。メディア・サウンドバイト⁹の制約がある中で、こうした難解な議論は取り上げられにくい。だからといって、科学者が試み続けるのを止めるべきだということにはならない。なぜならば、メディアへの働きかけを止めてしまうと、自動的に勝負に負けてしまうことになるからだ。

科学者は、好むと好まざるにかかわらず、メディアが自分のメッセージをきちんと伝えてくれると信頼する他はないのかもしれない。確かに放送メディアは「サウンドバイト」文化による制約があるが、より長い特集記事など、全国紙にはたくさんの機会があるはずだ。長い特集記事などでは、複雑なリスク・コミュニケーションの本質を伝えうる、より良い議論が行われるチャンスが高い。しかし出席していた「メディア・モニター」¹⁰によると、そのような記事は残念ながらごく稀であった。「プライベート・アイ特集号(Private Eye special edition)」はMMRに関して非常に偏向的な(危機感を煽る)アプローチを取り、英国内の全てのニュース・スタンドに登場した。しかし、逆にMMRワクチンを擁護する論調の、同程度の出版物は無かったのである。

あらゆるワクチンには全てリスクがある、という事実は十分に報道されなかった。薬物には反対の副作用があるということを知っているから、「全くリスクがない」と言われたら、そのことに対して市民が疑念を持ったとしても不思議ではない。一人の出席者が指摘したように、これは、メディアが「ワクチンは必ずしも個人的な選択ではなく、公の義務である」という議論をする最も重要な場面であった。

より大きな視点から- 公共政策としてのワクチン

MMR スキャンダルは、公共政策として広範囲に子どもたちにワクチン注射を行うべきか否か、という問題を提議した。(混合ワクチンの代替としての)単種ワクチンへの親のアクセスを禁止すること¹¹は、まるでワクチン接種の全過程に不安があるかのように捉えられてしまう、という指摘があった。それは20世紀の公衆衛生向上に寄与した最大の業績の一つを傷つけることとなる。政府がワクチンの相対的な安全性を再確認することは正しいことであったが、その後もそれを唱え続けることは、かえって人々を不安にさせただけだったのかもしれない。

この件に関する、政府の度重なる「親の選択の否定」は、すでに不安になっていた親をさらに不安にさせた。そのうえ単独ワクチンが認可されていなかったという事実は、さらに事態を悪くした。ただ、

⁸ 「集団免疫(herd immunity)」は、公衆衛生分野においては専門用語として確立している。しかし、Herdという単語は、一般的には「牛・豚の群れ」のことを示す。このため、(科学的には正確だが、社会的には馴染みがなく、また不穏な印象を持つ語として)イギリス社会の子を持つ親にとっては「我が子を家畜扱いされる」という危機感を煽るかたちで受け取られてしまったのである。

⁹ メディア・サウンドバイト：メディアが、短く印象的な語句やフレーズ、あるいはそうした映像カットを使用して読者や視聴者を引きつける行為。サウンドバイトはしばしば批判の対象となるが、それ無くしてはメディアに読者・視聴者を引きつけることが出来ないという点も指摘されている。

¹⁰ メディア・モニター：テレビや印刷媒体の報道・広告内容などを常時観察し、顧客に分析報告する組織、あるいはそのスタッフ。

¹¹ 「混合ワクチンであるMMRが危険ならば、単種のワクチンをそれぞれ接種すれば良いではないか」という意見に関して、権威筋が抑制的に動いたことを言っている。

単独ワクチンを要求した一握りの中流階級の親たちが、もしその要求が満たされていたなら満足したであろうか。懸念を持った人々は本当に中流階級だけだったのだろうか。

はしかか自閉症か—あなたが決める

はしかとおたふく風邪のリスクを市民に再認識してもらうことの重要性は、出席者が一致して認めた。しかしながら多くの人々が、研究者サイドは自らの主張を強めるために、はしかやおたふく風邪のリスクを誇張しすぎたのではないかと考えている。「親が子供たちの命でロシアンルーレットをしている」と非難することは、むしろ大きな反発を生み、政府の声明に対する親の信頼を失うことにつながる。「パニックを起こすことで一つのパニックを鎮める」という戦略が効果的でないことには、多くの人々が同意するだろう。そもそも、BSE の大失敗¹²の後で既に政治への信頼を失っていた市民は、MMR に関する行政からの全ての声明を、自動的にプロパガンダと受け取ったのである。

人々は、リスクを自ら選択することを嫌い、それよりは何もしないでリスクに晒されることを選択する傾向にある。MMR ワクチンによるリスクは、はしかよりも確実に小さいにもかかわらず、MMR という選択に対する親の評価が低いことも、このリスク選択の傾向を反映している。最近まではしかは、多くの子供たちがかかっても回復する病気であった。そのため市民はたくさんの逸話的な経験を持ち、それは病気に対する懸念を過小評価させた。¹³

自閉症の科学的な原因究明が遅々として進んでいないという状況も、MMR ワクチンに関する論争が拡大した理由の一つである。自閉症に関して活動を行っている（患者支援団体などの）人々の多くは、自閉症の「犯人」を探しており、MMR はその条件にぴったりはまったのだ。結果として今回の論争は、研究支援が不足している自閉症研究という分野に対する世間の注目を高めた。一人の出席者は「議論が盛り上がり最も得をしたのは自閉症活動家だ」と皮肉った。そしてウェイクフィールドは「自閉症を持つ子供の親たちの話に耳を傾けてくれる、数少ない科学者の一人」と見られ、そのため親たちのコミュニティから絶大な支持を得たのである。

「白衣を着た者たち」による攻撃？

MMR の論争に関与した科学者の見識に関する議論も多く行われた。「専門家が発することのできる最も強力なメッセージは、自分の子どもにワクチンを受けさせることだ」という意見が何人かによって提示された。トニー・ブレア首相は模範として行動することを期待されていたが、自分の息子がワクチンを受けたかどうかということについては発言を拒絶した。このことは大きな問題となった。多大な影響力を持つ彼は、多くの人々の模範として行動することを期待されていた。それだけに、彼の言動は家族のプライバシーを守るためというよりは、MMR の不確かさを認めているように映ったのだ。

科学者が、冷たく感情がない人々と見られている限り、子どもの健康を心配する親身な親が、メディア上の議論で科学者に勝つ可能性は高い。科学者は事実に基づく分析や統計的な証拠にこだわる傾向がある。一方で強力な主張はしばしば感情的で逸話的である。会議に出席していたマスコミ通の人々は、

¹² 英国においては、BSE（狂牛病）対策の科学的・政治的失敗は、大きな禍根を残している。80年代後半からBSEの危険性が叫ばれるなか、1990年には時の農業大臣が娘と共にハンバーガーを食べる写真を公開するなどして安全性を断言していた。しかし1996年に到り、政府はこれまでの見解を一転させてウシ・ヒト感染の危険性を認めるに到り、これは大きな社会パニックを引き起こした。この事象が、MMRと対置的な構造を取っていることは、本稿における議論の前提として注意する必要がある。

¹³ この「はしかを侮る」傾向は、実は英国よりも日本でより強い。はしかの、肺炎や脳炎の併発による死亡例は、想像されているよりも高い。また日本は先進国中で、はしかの制圧が遅れている後進国であり、国際的には「はしか輸出国」との悪名も存在する。日本では年間10～20万人が罹患、数十人が死亡している。ワクチンの二回接種が推進されているアメリカでは数十人／年程度しか罹患していない。これは人口比を考慮するまでも無く、日本のはしか軽視傾向を表していると言えるだろう。

このような修辭的な手段で訴えかけることで古臭い「調査によると・・・」という常套句から脱却できるのではないかと主張した。

残念ながら、誰が本当の専門家なのかを判断するのは、市民にとって非常に難しい。出席者の何人かが指摘したように、自閉症を持つ子どもの持つ親は、その症状や自閉症の影響については専門家であるとも言えるが、ワクチンの安全性に関するバランスの取れた判断をする立場にはない。また、論争のプロセスを通じて政治家による「科学的な発言」もまた多かったことが指摘されたが、それは科学者のメッセージを薄めたとも言える。論争にはたくさんの「専門家」が介在しすぎたのではないだろうか。実際、MMR の使用を支持する科学者は直ちに「政府の科学者」と見なされ、そのため彼らのアドバイスは軽視された。何人かの医療従事者は、ウェイクフィールドの調査研究の多くの部分が（そしてそれを報じたメディアも）自閉症を持つ子どもの親を病気の症状に関する専門家としてではなく、病気の専門家として扱っていると指摘した。

「権威ある」科学者たちの動きに疑問が投げかけられる一方で、出席者の何人かは、ウェイクフィールドが提示した MMR と自閉症の相関性を批判した際の、科学の多数派の手法も稚拙なものであったことを指摘した。メディアは常に敗者が好きである。ウェイクフィールドと多数派の意見との間の戦いは、ダビデとゴリアテの対決のように描かれた。メディアの注視のもとで、科学における少数意見を批判することは破滅的な戦略である。これは弱いものいじめのように見えてしまうからだ。むしろ科学界の多数派は、ウェイクフィールドの問題意識や証拠が織りなすメッセージに、きちんと耳を傾けていることをアピールすべきであった。それによって彼を「仲間に迎え入れる」ことができ、公衆に対しても、この議論が科学の正常なプロセスの一部であることを伝えられたと思われる。また同様に、MRC¹⁴がウェイクフィールドの調査をどのように評価したかということについて、よりオープンであったならば、市民は社会全体のために、科学者集団が最善の行動を取っていると信じることにやぶさかでは無かっただろう。ただし実際には、アンドリュー・ウェイクフィールドは委員会に根拠となる証拠を提出するように何回か依頼されていたが、そのたびに申し入れを断っていたわけだが。

メディアは、MRC の自閉症調査委員会のメンバーの何人かが、ワクチン製造業者から研究資金を提供された過去があることを「暴露」し、そのために調査委員会の審査における全過程が不正であったと結論付けた。しかし、（これは暴露というほどのものではなく）MRC は最初から、調査委員会のメンバー内の潜在的な競合利益について、明らかにしていたのである。もしも MRC が調査対象との間に潜在的に競合する商業的もしくは他の利益がある人を完全に排除したならば、狭い分野であるため、科学者を含む委員会を招集することは事実上不可能であっただろう。興味深いことに、世間の認識とは裏腹に、MRC は政府から MMR に関する声明を発表するように頼まれたことはないし、MMR に関する記者会見や報告を行ったこともない。唯一 MRC がしたのは、MRC の助成金を受けて自閉症研究をおこなっている研究者に対するメディアのインタビューを仲介したことだけである。それにもかかわらず、彼らはこのテーマに関する「政府の情報源」と見なされているのである。

科学及びメディア界が、どのように「異端者」と向き合うかは、その異端者の研究結果が、評価されるか、非難されるか、もしくは無視されるかという結果に極めて重大な影響を与える。しかし、出席者の一人が指摘したように、異端者が正しいとわかれば、科学界は考え方を改めるだけの柔軟性を有しているし、こうなれば異端者はもはや異端者たり得ない。結局のところ、科学のシステムが正常に作動している場合に、長きにわたって異端者であり続ける科学者は、ほとんどの場合は「間違っているから」異端者なのである。

¹⁴ MRC: Medical Research Council. 英国の科学研究を統括する RC の一組織で、医学関係の研究を統括運営する立場にある。

一方で、役に立つアイデアは、時として主流ではない分野からもたらされるので、主流派の科学者は彼らの声に注意深く耳を傾けるべきだ、という指摘もなされた。つまるところ、科学者は適度に懐疑的である必要があり、それはメディアも同じである。何人かの出席者は、この点こそが、主流派でない科学者が同業者に背を向け、メディアを通して一般市民を納得させることに注力している場合、科学とメディア双方にとって不可欠の要素であると指摘した。マンガの中には「正義のために権威の暴虐と戦う」ヒーローがしばしば登場するが、大胆な主張をすることによってアンチ主流派の名声を異端者が得たとしても、それは彼が正しいということ、ただちに意味するわけではないのである。

メディアの影響

多くの医療従事者は、地方や中央の衛生局よりも、メディアからヒントを得ていると言われている。このこと自体も憂慮すべきことであるが、メディアのMMRの安全性に関する報道は極めて断片的なものにすぎず、それらの情報を統合・整理し、一つのストーリーとして人々に規範を提示しなかったことが、事態の悪化に拍車をかけた。このため、たくさんの重要な研究結果が大量のメディアの記事の中で埋もれてしまった一方で、ウェイクフィールドやJABS¹⁵からの反対意見は、全ての記事で繰り返し紹介されていた。「これはバランスのとれた報道とは言えないのではないか？」という声何人かの出席者から上がった。同様に、「政府による」調査のあらゆる面に対する批判がされる中で、ウェイクフィールドはメディアから批判的な分析をされることはほとんど無く、むしろ「内部告発者」として褒め称えられた。

また、JABSのようなマイノリティの圧力団体は、英国の全ての親の不安を代弁しているかのように報道された。何人かの人々は「これはパブリック・オピニオンをメディアが伝える上では大きな誤謬であり、結果として関係する全ての人々に大きな損害を与えた」と指摘した。こうした誇大広告にもかかわらず、総じて多くの親は、MMRワクチンが子どもたちに対して、ただちに自閉症を引き起こすとは信じなかった。しかしながら、世間には少数ではあるが、ワクチンによる副作用を「引き起こしやすい遺伝的特性を持つ」人々が存在していることは考慮しなければならない。

また、予防接種率の減少に関するメディアの報道は、MMRワクチンに関する市民の懸念を増幅させた可能性がある。公衆衛生試験所(PHLS)によると、多くの人が考えていたほど予防接種率は落ちてはいなかったが、この情報は、もともと接種率の低いロンドンにおける、予防接種率のさらなる減少に対する恐怖によって無視された。

実際のところ、メディアがこの問題を、「政府を攻撃するキャンペーンの材料」として使うことを決めたときから、科学者に出来ることはあまりなかった。このことは、風疹の危険性に関する記事が少ないことから見て取れる。(MMRワクチンを拒否することによって風疹の危険性が高まる、という)科学的証拠に基づいたストーリーは、当時のメディアのアジェンダ設定にはそぐわなかったのである。また、メディアは、個々の親たちが直面した本当の決断について注意を払わなかったことが指摘された。報道の中で用いられた数々のレトリックは、事実を役立たずで提供するというよりは、しばしば世間を困惑させ怯えさせるだけであった。医師が子供を持つ親の懸念を取り除くにあたっては、全国メディアを通してではなく、個人的な対話を通じて対処するほうを好んだのも無理はないのである。

¹⁵ JABS: Justice Awareness and Basic Support (“正義の認知と基本的保証を求める会”)。「ワクチン被害者」の子を持つ親による団体。医療事故による児童への損害が保証されていない場合に援助を求めるなど、蓋然性の高い要求も行っている団体だが、MMRワクチン問題に関しては政府批判の急先鋒となった。

結論

私たちが当初期待したとおり、会議の参加者は全員が MMR の問題に関して率直な議論を交わし、積極的に見解を共有した。時に加熱する議論を止めるだけのタフさを持ちあわせたフィオナ・フォックス議長の議事進行は、多くの人々に評価された。出席者の多くは MMR 危機において、仕事の上で同席したことはあったが、これまでに、この問題について個人的に意見を交わした機会はなかった。この直接対話の機会を提供したことも、この会議における成功の一つといえる。この成果は、このようなタイプの議論をすることの出来る、中立的な会議の必要性と重要性を示したと言える。

当たり前のことだが、会議で出された多くの主張から、統一された見解を出すことは難しい。しかしこのことは、より議論を共有できる場の重要性を高めるとも言える。なぜなら、こうした場の提供は、科学に関するコミュニケーションの向上のための出発点を提供し、特に MMR の問題に関する公の議論の質の向上に資するからである。

複雑な科学的問題に対処するとき、科学界がこうした議論を適切な方法にもとづき、適切な時期に行うことが出来る場を提供することが緊急の課題である。言い換えると私たちは、よりメディアに精通しなければならないのだ。特に懸念されることは「異端の科学者」に対する科学界の対処法である。科学の発展のためには反論が重要であることを考えると、科学は、主流派とは意見が異なるというだけで反対意見を取り締まっている、という風に見られてはならない。もし、自由な議論の場が科学にとって重要なことであるならば、一般市民にそれを実践していると認めてもらえることが非常に重要なのである。

しかしながら、またメディアの「異端者」に対する取り扱いも検証を要する。ふつう研究者は、最初のうちは論争の余地があったとしても、その後の検証を経て結論を下すことができる。MMR と自閉症に関しては、そうはいかなかった。そして、ウェイクフィールドの立ち位置がジャーナリストによる検証を受ける機会は、あまりにも少なかった。科学者は公の場で彼の調査を批判したが、これらはしばしば科学的な批判と言うよりはむしろ個人攻撃であると捉えられた。科学者はその信頼性を失いたくなければ、この「個人」あるいは「専門家」としての批判という曖昧な境界線の中で、メディアを含めた自分の持っているすべての繋がりを使って主張する必要がある。同様に、メディアは明確に科学的批判と個人批判を区別する必要がある。

どのようなコミュニケーション戦略が使われようとも、科学者はその誠実さを保つ必要がある。脅しや、真実でない言葉に頼っていると受け取られたならば、確実に議論に負けるだろう。同様に、健康に関する堅実なメッセージは、医療従事者があまりにもパターンリステイックな態度をとってしまうと、市民に聞き流されてしまう。しかしながら、今回のケースのように、間違った研究結果に対してメディアによる検証が十分になされていないと科学界が考えるならば、その状況を変える最も手っ取り早い方法は、そのことを指摘するために、メディアに積極的に参加することだ。また、この際に科学者は、完全に論理に則るのではなく、感情的なアプローチを併用することも非常に有効であろう。もしも子どもを持つ医者が自分の子どもに対してワクチンを打つことを話せば、聞いている市民は彼らの科学的な議論に関しても個人的な興味を持ち、耳を傾けるようになるだろう。

私達の文化におけるメディアは、非常に重要な役割を担っている。その効果は、医療従事者や政府よりも、親に対して強い影響を与えることが出来るほどである。この前提に基づけば、記者及び編集者は責任を持って公共の利益に適合する記事を書かなければならない、という大きな義務を負っている。また、もし科学者が市民と効果的にコミュニケーションを図りたいと考えるならば、まずメディアと効果的にコミュニケーションをとる必要があるのだ。

我々は、MMR のコミュニケーション問題に関して、いずれまた会議を開くつもりである。この際には、少数のグループによって、科学者がより効果的に発言できるような戦略を練る予定である。ある医療従事者が会議で述べたように、市民は「MMR が安全かどうか」を誰かから聞きたくてたまらないのだ。したがって、再び MMR が記事の見出しを飾るときには —その時は遠くない将来に必ずやって来るだろうが— 科学者とジャーナリストが協力し、市民に情報を可能な限り責任を持って伝えることが重要となるのだ。

【会議参加者リスト】

Karen Allen, Health Correspondent, BBC
Judith Barnard, Director of policy and public affairs for the National Autistic Society
Dr Helen Bedford, Institute of Child Health
Neil Bennett, Health Correspondent, BBC
Professor Sir Colin Berry, Royal London Hospital
Dr David Boak, Director of Communications, The Royal Society
Dr Rebecca Bowden, Office of Science and Technology
Tracey Brown, Sense about Science
Emily Collins, Press Officer, PHLS
Carolyn Coote, Assistant Director, Science in Government
Dr Natasha Crowcroft, PHLS
Carolan Davidge, Chief Press Officer, MRC
Dr Bernard Dixon, Science Writer and Consultant
Dr Peter Dukes, MRC
David Elliman, Institute of Child Health
Dr Mike Fitzpatrick, GP
Fiona Fox, Head of the Science media Centre and Chair of the meeting
Carole Fry, Nursing Officer, Dept of Health
Veronique Gibbons, Immunisation Division, PHLS
Tony Gilland, Institute of Ideas
Pallab Ghosh, Science Correspondent, BBC
Simon Gregor, Head of Press and Media Activities, PHLS
David Hall, Hazards Forum
Adrian van Klaveren, Head of News Gathering, BBC
Professor Melissa Leach, Social Anthropologist, University of Sussex
Natasha Martineau, COPUS
Neil Martinson, Head of Communications, Food Standards Agency
Malcolm Matthews, Director of Community Support and Information, SENSE
Dr John Maule, Centre for Decision Research, Leeds University
Victoria Mayers, Press Officer, SENSE
Joff McGill, Head of Voluntary Services Team, SENSE
Philip Minor, National Institute for Biological Standards
Marjorie Monickendam, Press Officer, PHLS
Dr Rachel Moore, Scientist, Lovells
Caroline Moore, Barrister, Lovells
Becky Morelle, Science Media Centre
Vivienne Parry, Journalist and Broadcaster
Dr Mark Peplow, Science Media Centre and *rapporteur*
Dr Nick Russell, Imperial College
Dr Simon Singh, Science Writer and Broadcaster
Tammy Speers, Media Studies, Cardiff
Jo Thomas, Internal Communications, Department of Health
Eleanor Treharne-Jones, Senior Press Officer, Dept. of Health
Dr Tom Wakeford, PEALS
Bob Ward, Press and PR, The Royal Society
Dr Joanne White, PHLS
Andy Veitch, Science Correspondent, Channel 4 News
Jeremy Webb, Editor, New Scientist
Professor Simon Wessely, Institute of Psychiatry, King's College, London
Ms Joanne Yarwood, Health Promotion England

【謝辞】

自閉症の社会的位置づけに関して研究を重ねられている金沢大学の東島仁氏には、翻訳内容の確認並びに前書きにおいて、貴重な助言を頂きました。また、国立感染症研究所の布施晃氏には、本公開バージョンの作成にあたり、多くのアドバイスを頂きました。ここに御礼申し上げます。

翻訳版作成にあたっては、科学技術振興機構 社会技術研究開発センターの平成 21 年度採択研究開発プロジェクト「科学技術情報ハブとしてのサイエンス・メディア・センターの構築」（代表者：瀬川至朗教授・早稲田大学政治学研究科ジャーナリズムコース）の支援を受けています。

『MMR ワクチン論争』から学ぶ

翻訳：田中幹人、正司彩（早稲田大学政治学研究科 ジャーナリズムコース）

公開日：2010 年 4 月 2 日

公開元：サイエンス・メディア・センター（日本） www.smc-japan.org

“MMR: Learning Lessons” by Science Media Centre

Copyright © 2002 by Science Media Centre

Translated by Mikihito Tanaka and Aya Shoji (Graduate School of Journalism, Waseda University)

Opened 2010 in Japan by Science Media Centre of Japan

Translated version copyright © 2010 Science Media Centre of Japan

